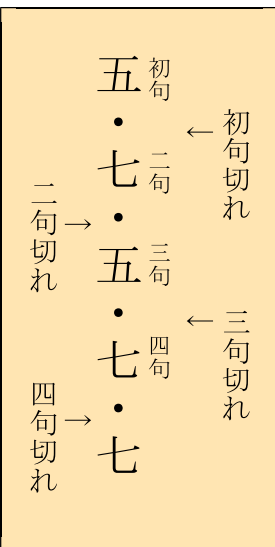


句切れ



枕詞

ある語を導き出すために前に置く語。元々は意味を持っていたが、次第に意味が薄れて形式的なものになった。万葉集に多く用いられる。多くは五音からなり、ふつう訳す意味を持たないが、訳に入れた方がよい場合もある。

青丹あおによし ↓ 奈良 / 久方の ↓ 空・光 / そらみつ ↓ やまと / わだつみの ↓ 海 / 足引きの ↓ 山  
 あかねさす ↓ 紫・日・照る / 垂乳根たらちねの ↓ 母 / 梓弓あづさゆみ ↓ はる・ひく / あまさかる ↓ ひな・日  
 天野原 ↓ ふりさけみる・富士あらたまの ↓ 年・月・春 / いはばしる ↓ 垂水たるみ・滝 / うつせみの ↓ 命・世・身  
 からころも ↓ 着る・裾・袖 / くさまくら ↓ 旅・露 / しきしまの ↓ 大和 / しるたへの ↓ 衣・袖・雪・雲  
 千早振ちはやぶる ↓ 神 / とぶとりの ↓ 飛鳥あすかみづとりの ↓ 立つ・うき / やくもたつ ↓ 出雲

掛詞

古今和歌集、新古今和歌集に多い。ひとつの言葉に二重の意味を兼ねさせる。同音異義語を利用した方法。

花の色は移りにけりな 経るいたづらに 眺め我が身世に 降るふる 長雨ながめせしまに 小野小町  
 難波江の 仮り寝蘆の 一夜かりねの 身を尽くしひとよゆゑ 濤標みをつくしてや 別当恋ひわたるべき

体言止め

終わりを体言（名詞）で止め、すべてを言い切らないことで深い余情を残す技法。新古今和歌集に多い。

さびしさたへたる人の またもあれな いほり庵ならべん 冬山里 西行  
 駒とめて 袖打ちはらふ かげもなし 佐野のわたりの 雪の夕暮れ 藤原定家

歌枕

イメージの定着した地名。

飛鳥川

古来、飛鳥川は流れが定まらないことで知られていた。よって、「飛鳥川」は、無常のたとえとして歌に詠み込まれた。

飛鳥川 淵は瀬になる 世なりとも 思ひ初めてむ 人はわすれじ よみひとしらず

難波潟

難波潟は、葦が多く生えていた。葦は節と節の間が短いことから、ほんのしばらくの時間のたとえに用いられた。

難波潟 短き 蘆の 節の間も あはでこの世を 過ぐしてよとや 伊勢